

(鉄則19、20の解説を抜粋)

- (ア) ……事実(できごと) ……(例) 仲よしの子と、けんかをした。
 だから ← → なぜなら
- (イ) ……心情(気持ち) ……(例) 寂しくなった。
 だから ← → なぜなら
- (ウ) ……言動(セリフや行動) ……(例) 泣いた。

問いの多くは、「泣いたのはなぜか」と、言動の理由を問う。説明的文章であっても、この形は変わらない(結論(ウ)の根拠を問われる)。

このとき、(ア)は文章中に比較的分かりやすく書かれているのが普通だ。しかし、(イ)は書かれていないとか、あるいは見逃しやすいつか、整理されていないとか、そういう場合が多い。(ア)だけでなく、(ア) + (イ)で答えないと不十分になる。その(イ)を見逃すなど忠告するのが、**鉄則19**である。「ア」だから(ウ)ではなく、「ア」のため(イ)、だから(ウ)」と整理するわけだ(前者を急行列車、後者を各駅停車と私は呼んでいる)。

ただ、この鉄則には欠点がある。これは基本的に「時間的前後関係」があるとき(ア) ↓ (イ) ↓ (ウ)と順番に現象が生じているときに使うものであって、そうでないときには使いづらいということだ。

そこで、**鉄則20**が存在する。

これは、ひとことで言うと「**三段論法**」の型である。

だからこれを「ふくしま式」などと呼ぶのはおこがましい点もあるのだが、三段論法を小学生に本

気で教えている塾や先生を、私はほとんど知らない。それを分かりやすく提示し遠慮なく活用させていくところに、オリジナリティがある。

最近では、**鉄則19**よりも**鉄則20**のほうをよく指導している。**鉄則19**のケースも含め、あらゆる場面で活用できるからである。

そして、最新のふくしま式では次の二つを、因果関係整理の技術として生徒たちに指導している。

ふくしま式「なぜですか」攻略法

Ⅰ「前件肯定」パターン

(例)

(問い)「①は②であると言えるのはなぜか」

「ソクラテスは死ぬと言えるのはなぜか」

(答え)「①は③であり、③ならば②だから」

「ソクラテスは人間であり人間ならば死ぬから」

Ⅱ「後件否定」パターン

(問い)「①は②でないとと言えるのはなぜか」

「この鳥はカラスでないとと言えるのはなぜか」

(答え)「②ならば③だが、①は③ではないから」「カラスならば黒いが、この鳥は黒くないから」

鉄則20の「むすんでたどる」という表現は、二つの根拠を結びつけて考えろということの意味する。

「①は③である」と「③ならば②」を結びつける、あるいは「②ならば③である」と「①は③ではない」を結びつける、といった具合である。

ところで、この本は論理学の本ではない。できるだけ簡素化し、実用に即した部分だけを紹介したい。しかし、用語を持ち出している以上、ある程度は説明せねばなるまい。

三段論法の基本パターン

	大前提	小前提	結論
前件肯定	必ず真なり	AならばBである。(これは) Aである。	ゆえにBである。
前件否定	必ずしも真ならず	AならばBである。(これは) Aでない。	ゆえにBでない。
後件肯定	必ずしも真ならず	AならばBである。(これは) Bである。	ゆえにAである。
後件否定	必ず真なり	AならばBである。(これは) Bでない。	ゆえにAでない。

この四つのうち、二つの前提さえ正しければ結論が必ず正しくなる(真になる)のは、「前件肯定」と「後件否定」だけである。

結論が正しいのであれば、「なぜですか」などと前提(理由・根拠)を問う設問(逆にたどらせる設問)も出しやすくなる。読解問題において「なぜですか」と問われるのは、多くの場合、前件肯定・後件否定の形で説明しうるケースである(言語は数学ではないので絶対とは言えないが)。

そこで、前件肯定・後件否定について、具体的にチェックしておこう。
前件・後件という表現の意味は単純である。「AならばB」のAが前件(前にある内容)、Bが後件(後にある内容)ということだけのことだ。なお、A・Bという記号は、論理学においては一般にP・Qを使うが、ふくしま式ではどの型でもA・Bを使っているので、それに合わせている。

もう一つ補足しておく。前ページ「攻略法」の〈I〉(答え)で示した「①は③であり、③ならば②だから」は、正確に言えば「小前提↓大前提」の順になっており、右に示す基本パターンとは逆順である。しかし、読解設問をスムーズに解くためには、この順序で考えるほうがよい。

〈I〉前件肯定パターン

AならばBである。(これは) Aである。ゆえにBである。

下図右は、「AならばB」という「大前提」を示している。

★は、目の前の「これ」すなわち具体的な主題を意味する。図を見ながら確認してほしい。「AならばB」という大前提のもと、もう一つの前提(小前提)として★がAである(Aに含まれる)ならば、当然の結論として、★はBでもある(Bにも含まれる)ことになる。いたって単純だ。

ここで29ページの「攻略法」と例文をおさらいする。これも、下図左※を見ながらチェックしてほしい。

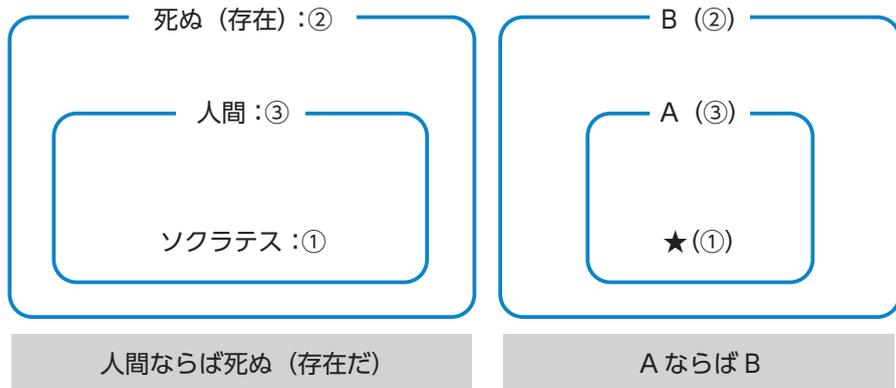
①〜③は解き方の手順を示している。

(問い)「①は②であると言えるのはなぜか」

「ソクラテスは死ぬと言えるのはなぜか」

(答え)「①は③であり、③ならば②だから」

「ソクラテスは人間であり、人間ならば死ぬから」



※図示する際には「存在」などの語を補わないと不自然になる(人間は「死ぬ」に含まれるのではなく「死ぬ存在」に含まれる)。しかし、実際に読解問題を解く際には、いちいち図示する必要はないので、こうしたことを気にする必要はない。

(本文) 今日が雨が降っています。先生は、「遠足は雨が降ったら中止です」とおっしゃっていました。遠足は、今日は中止ですね。

(問い) 「今日は中止です」とあるが、なぜそう言えるのか。説明せよ。

(答え) 今日は雨であり、雨ならば中止だから。

—— 解き方 ——

まず傍線部をパーツ分けし、番号を振る。

(問い) 「今日は／中止です」と言えるのはなぜか。

①は／②である」と言えるのはなぜか。

次に、間に入る情報である③を考える。

(答え) ①は／③であり、／③ならば②だから

「今日は／雨であり、／雨ならば／中止だから」

いかがだろうか。非常にシンプルな手順である。

要は、「なぜですか」と問われたら「③に何が入るか」を考えればよい。それだけなのだ。

これは、次の後件否定パターンでも同じである。

〈Ⅱ〉後件否定パターン

AならばBである。(これは) Bでない。ゆえにAでない。

下図右は、先ほどと同じく、「AならばB」という「大前提」を示している。★は、目の前の「これ」すなわち具体的な主題を意味する。「AならばB」という大前提のもと、もう一つの前提(小前提)として★がBでない(Bに含まれない)ならば、当然の結論として、★はAでもない(Aにも含まれない)ことになる。やはり、いたって単純だ。

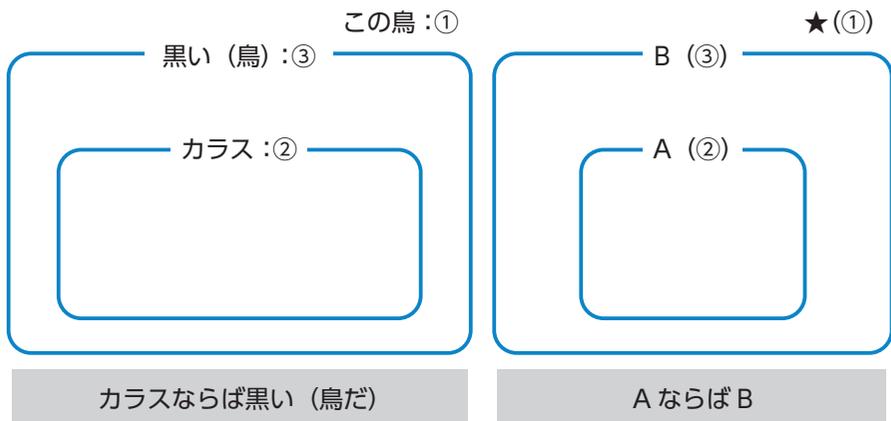
ここで29ページの「攻略法」と例文をおさらいする。これも、下図左を見ながらチェックしてほしい。※

(問い) ①は②でないと言えるのはなぜか

「この鳥はカラスでないと言えるのはなぜか」

(答え) ②ならば③だが、①は③ではないから

「カラスならば黒いが、この鳥は黒くないから」



※31ページの図とくらべて②・③の位置が逆になっていますが、これはミスではありません(あくまで解き方の手順を示すものです)。

(本文) このお店は、月曜は休みです。今日はお店が開いています。今日は月曜ではないということですね。

(問い)「今日は月曜ではない」とあるが、なぜそう言えるのか。説明せよ。
(答え) 月曜ならば休みだが、今日は休みではないから。

解き方

まず傍線部をパーツ分けし、番号を振る。

(問い)「今日は／月曜ではない」と言えるのはなぜか。

「①は／②でない」と言えるのはなぜか。

次に、追加すべき情報である③を考える。

(答え)「月曜ならば／休みだが、／今日は／休みではないから」

「②ならば／③だが、／①は／③ではないから」

単純な原理だ。小学三、四年生でも分かる。

実際に「なぜですか」と問われたとき、前件肯定と後件否定、どちらのパターンなのかを見分けるのも、さして難しくくない。

「……ではないと言えるのはなぜか」というように否定形になっていれば、後件否定の型をイメージしてみればよい。**※** そうでないなら、前件肯定の型をイメージする。

ただし、先にも触れたように、言語は数学とは異なる。

全てを型どおりに処理できるかといえば、そうではない。それは、他の鉄則で述べているどの型であれ、同じことである。型どおりにできないと思ったら、意味が通じるように型を破っていくしかない。

しかし、型を破るにも「まず型ありき」である。型を持たないのに型破りをしようとしたらそれは型破りではなく「型なし」である、とは、よく言われることである。

ところで、30ページで「真ならず」とした「前件否定」と「後件肯定」が気になっている人もいるかもしれない。ページも限られているが、少しだけ紹介しておこう。

まず、後件肯定から。

「AならばBである。(これは) Bである。ゆえにAである」

「人間ならば死ぬ。この生き物は死ぬ。だから人間である」

これだけで、いかにおかしな論理かが分かる。犬だって魚だって虫だって死ぬのだから。要するに、後件肯定にだまされることは少ない。

問題は、前件否定である。

「AならばBである。(これは) Aでない。ゆえにBでない」

「月曜ならば休みだ。今日は月曜ではない。だから休みではない」

これ、つい納得しそうになる。しかし、月曜以外に休みがないとは言いきれない。日曜も休みかも

※こう書くと、後件否定の「後件」とは「①は②でない」の②を指すと思われがちだが、実際には③が「後件」である(30ページの後ろから6行目、及び33ページの図を参照)。ただ、実践上、この点を気にする必要はない。問われている文が否定文の場合は後件否定の型で考えてよい、という効率的な判別方法の話である。

しれず、今日が日曜ならば、休みである。
 ということで、気をつけるべきは前件否定である。

理由を問う選択式設問において、その二択選択肢の中にこういうのが紛れている可能性があるから、覚えておいて損はない。

ここまで説明したので、もう一つだけ。

下図は、「逆・裏・対偶」という論理関係図である。これまで述べてきたことと密接に関係している。

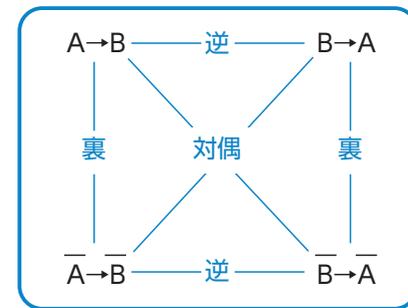
「AならばB」の対偶は、「BでないならばAでない」。すなわち、「AならばB」という大前提と、「Bでない」という小前提が成立するならば、「Aでない」と言えるということであり、これは後件否定の形である。

後件否定は、「対偶」。対偶は必ず真なり。ということである。

ちなみに、残り※はこうなる。

前件否定は、「裏」。裏は必ずしも真ならず。

後件肯定は、「逆」。逆は必ずしも真ならず。



逆・裏・対偶

(\bar{A} は「Aでない」)

鉄則21 選択肢は、まず手で隠せ。選択肢は、ワナの集合体だ。

選択式設問をラクだと思おうのは大間違いである。一つの突破口は、選択肢を見ずに（手で隠すなど

※前件肯定は「 $A \rightarrow B$ 」そのものであり、逆・裏・対偶に該当しないので、ここには書いていない。